

4. 高スコア検体の希釈は10倍以上が必要である。
5. 同時、日差再現性ともに、低スコアではある程度のバラツキが認められるが、他はほぼ満足すべき結果を得た。
6. 洗浄操作は最低3回必要である。
7. 従来の IgE RAST キットに比し、疑陽性例9例中に6例にスコア判定上昇が認められた。
8. 血清 IgE RIST と RAST との相関は認めなかつた。
9. スコア判定結果は皮内反応テストとほぼ良く一致していた。

6. Ferritin 各種測定の比較検討 (RIA, EIA)

樋口ちづ子	金森 勇雄	松尾 定雄
木村 得次	市川 秀男	安田 鋭介
(大垣市民・特放セ)		
中野 哲	北村 公男	綿引 元
武田 功	熊田 卓	(同・2内)
佐々木常雄	石口 恒雄	(名大・放)

現在血清フェリチン測定方法には、RIA 法 EIA 法、R-PHA 法等があるが、今回われわれはこれまでに入手し得た RIA 法および EIA 法による血清プリチンキットについて比較検討を行ったので報告した。

また、パックフェリチンキットと他のキットとの相関はダイナボットフェリチンキット間では、 $\gamma = 0.747$ ($p < 0.01$)、Gamma Dab フェリチンキット間では $\gamma = 0.972$ ($p < 0.001$)、RIA-gnost フェリチンキット間では $\gamma = 0.870$ ($p < 0.01$)、ファデズスプリストフェリチンキットとの相関は $\gamma = 0.667$ ($p < 0.01$)、EIA キット間では $\gamma = 0.707$ ($p < 0.01$) であった。

RIA 法および EIA 法による血清フェリチン測定用キットは、それぞれその測定方法、原理等は異っているが、Intra-, Inter-assay、稀釀、回収共に良好であったことから、どのキットも日常ルーチンワークとして十分応用できるものと考えるが、各キットの特徴を充分に把握して使用する必要があると思われる。

7. 血清フェリチン“正常値”について

—性差、年齢差の検討—

林 正明	石川 薫	(名大分院・産)
林 大三郎		(同・本院放部)
斎藤 宏		(同・放科)

健常人 206 名の血清フェリチンを測定し (SPAC Ferritin Kit, D.R.L.), 女子の年齢別の血清フェリチン「正常値」を中心に検討を加えた。

血清フェリチンの「正常値」を $\text{Mean} \pm 2 \text{ S.D.}$ より求めると、男子 (20~35歳), 16~252 ng/ml, 女子 (20~49歳) 5~80 ng/ml, 女子 (60~75 歳) 13~182 ng/ml であり、著しい成熟期の性差、および女子における年齢差が明らかとなった。

最近、悪性腫瘍などにおける血清フェリチンの臨床的意義の検討もさかんであるが、悪性腫瘍は高年齢者に多い。血清フェリチンの成績の解釈にあたっては、性および女子の場合には年齢に留意して検討することが必要と考えられる。

8. Tc-99m による RBC in vivo 標識；塩化第一スズ法の基礎的検討

香坂 誠	飛田 明	西尾 寛
高橋 優		(金沢医科大・中放)
宮村 利雄	興村 哲郎	山本 達
西木 雅裕	浜田 重雄	宮谷 博久
小林 真		(同・放)

Pavel らにより 1977 年、スズーピロリン離による、In vivo, RBC 標識法が報告されて以来、多数の報告がみられ心血管系画像診断および機能診断、消化管出血の検索等に利用されている。In vivo 標識法は、術式が容易でかつ無菌的に出来る利点がある。

今回、被検者集団を 3 グループに分け、それぞれのグループに、塩化第一スズ (日本メジフィジックス) を [2.7~3.8 $\mu\text{g}/\text{kg}$] [5.4~7.6 $\mu\text{g}/\text{kg}$] [10.8~15.2 $\mu\text{g}/\text{kg}$] を静注し、15 分後に $^{99m}\text{TcO}_4^-$ を静注し、In vivo RBC 標識における、① Tc-RBC の経時的安定性 ② Serum-RBC 放射能比と Image 上における Back-Heart 放射能比の関係 ③ 塩化第一スズの適量について検討を加えた。

①については $^{99m}\text{TcO}_4^-$ 静注後 30', 60', 180', 380', 480' に採取し、遠沈し定量の上清を分離後、2 回 ACD